Tokyo Union Theological Seminary

「現代の礼拝はなお一つ欠く」
——プロテスタント礼拝の起源と展開に学ぶ——

G. D. レーマン

序

主日礼拝は日本は勿論，全世界の諸教会にとって，欠くことの出来ない基礎的な行為である。それゆえ，しばしば繰り返し礼拝の充実が求められ問題にされるのである。プロテスタント教会においては，主日礼拝の性格と内容によってその会衆や会員の信仰が育成されると言えよう。したがって，その礼拝において伝えられる内容は云うまでもなく，その流れ，形式，順序もまた重要な要素である。プロテスタントの礼拝に基本的な要素が欠けているとしたら，それは信仰の育成上，重大問題であると云わねばならない。この点で我々の礼拝に大切な要素が欠如しているのではあるまいか。筆者は異文化からきた伝道者として38年間日本の教会の中で過ごしてきた。その立場から一つの問い掛けをしたい。既に二百余りの日本のプロテスタント教会で礼拝を守ってきたが，その多くの教会では罪の告白，懺悔の勧めと祈りを経験したことはない。なぜか。プロテスタントの礼拝の歴史からこの答えを探ることが本論の目的である。

プロテスタント教会の礼拝のルーツ

宗教改革と共に公の祈りの徹底的な改革が始まった。宗教改革者は聖書的な祈りはいかなるものかを探求し聖書の研究に取り組んだ。福音主義的な新しい祈りの形ができるのに十数年を必要とした。初期には古くからあったラテン語の祈りに手を入れ，相応しくない部分を省略し翻訳して用いた。しかし，聖書

NII-Electronic Library Service

Tokyo Union Theological Seminary

の研究と礼拝の改革が進むにつれて宗教改革者の礼拝に用いる祈りが大きく変化し，主日礼拝に用いる公の祈りの形が定まってきた。すなわち二つの基本的な祈り，罪の告白の祈りと執り成しの祈りに集約されてきた。主なプロテスタント教会の礼拝のルーツはスイスのチューリッヒとフランスのストラスブールにまで遡る。プロテスタント礼拝の初期からの展開，特に礼拝における罪の告白やざんげの勧めと祈りの歴史をたどってみたい（Old，98)。

宗教改革時代のローマ・カトリック教会ではミサの中に罪の告白はなかった。コンフィテオール（confiteor）と言う罪の告白の祈りはあったが，それは平信徒の告白ではなく，司祭がミサを執行する前の司式者自身の「階段祈禱」と言われるものの一部分であった。平信徒はミサに与る前に個別に告解場に入って司祭の前で罪を告白することが義務づけられていた。

プロテスタントになったストラスブールの教会における最初のミサの改定を実施したのは Diebold Schwarz である。ルターの改定ほど徹底したものではなかったが1524年２月16日に初めてドイツ語でミサを行った。シュヴァルツのリタージーは神学的に容認できない部分と司式者の個人的な祈りの大部分が削除され，従来のコンフィテオールの部分は会衆全員が唱える罪の告白の祈りに変えられた。ストラスブールだけでも1524-25年の１年間に十余りのドイツ語ミサの改訂版が出版された。はじめは，この罪の告白の祈りは第一人称単数が用いられたが，後には第一人称複数での罪の告白の祈りが加えられ，徐々に第一人称複数の祈りが定着した。これは会衆一般の罪の告白の祈りが従来のコンフィテオールに取って代わる最後の一歩であった。また，この礼拝の中の祈りはローマ・カトリックにおける個人的な告解の代わりでもあった（Maxwell，88-89，92)。

チューリッヒにおいてはツヴィングリがローマ・カトリックのミサの中にあるミサ典文の内容を攻撃しミサの改定を1523年に出した。ミサ典文に代えて四つの祈りを用いた。その四番目の祈りは罪の告白と赦しの求めであった。1525年４月にツヴィングリは Action oder Bruch des Nachtmals と名づけられたチューリッヒにおける最初のドイツ語リタージーを出版した。それ以後，これ

NII-Electronic Library Service

Tokyo Union Theological Seminary

はツヴィングリのリタージーの規範となった。ツヴィングリは聖餐式を年に四回守るように指示した（中世のローマ・カトリック教会ではミサが毎週執行されていたが信徒に要求されていたミサの参加は年に一度のみであった）。

ツヴィングリはだれよりも徹底的にローマ・カトリックの礼拝式に手を加えて単純な式文に変えた。しかし注目すべきことは聖餐式の時のみならず，毎週の主日礼拝においても，説教の後に罪の告白が含まれていたことである（Maxwell，82-85）。

1530年にブツァーはストラスブールの改革運動の指導者になった。ストラスブールは，ルターの影響のもとにあったが，ブツァーがツヴィングリの影響を持ち込んだ。その結果，ストラスブールの礼拝改革はルターとツヴィングリの間をとる via media になった（Maxwell，87）。ストラスブールではブツァー等の指導の下でプロテスタントの礼拝は再び初代教会で見られたキリスト教共同体の礼拝になったのである。この礼拝の中で行われる一般会衆の罪の告白と，その祈り，そしてそれに伴う赦しの宣言はその表われである。この祈りを確立する過程において，宗教改革者たちはまず従来のローマ・カトリックのミサにあるコンフィテオールの聖人の執り成しなどを省略することから始めたが，徐々に嘆きの詩篇，特に詩篇の25篇と26篇の影響を受け，聖書の言葉を生かした罪の告白の祈りに変えていった（Old，98）。

1526-39年までのストラスブールにおける教会の礼拝改革時代についてブツァー自身が次のように述べている。「会衆が日曜日ごとに集まるとき，牧師は会衆全体に自分たちの罪を告白して，それが赦されるように祈ることを強く勧める。そして，牧師は会衆全体を代表して神に罪を告白し，赦されるように祈り，そして，罪の赦しを宣言する」（筆者私訳）。1537年までに礼拝式文は三つの罪の告白の祈りから選択できるようになっていた。歴史的に特に重要なのは1537-39年の間ストラスブールで用いられた Psalter mit aller Kirchen bung（1537年出版）の中にあるリタージーである。その後のカルヴァンとスコットランドの礼拝式文は共にこのリタージーに基づいて作られたからである（Maxwell，100-101）。そして，ツヴィングリより聖餐式の回数を増やす方針を立て

NII-Electronic Library Service

Tokyo Union Theological Seminary

ていたカルヴァンは礼拝を御言葉のリタージーと聖餐のリタージーに分け，御言葉のリタージーの充実に心を砕いた。

この1537-39年のストラスブールのリタージーには三つの罪の告白が用意されていた。そのいずれもが第一人称複数を用いており，内容的には聖書的な表現で人間の罪深さと不服従と不信仰を告白し，神の憐れみと恩恵と赦しを求めている。最初の祈りは従来のコンフィテオールに手を加えたものであり，二番目は特に三位一体を強調する祈りであり，三番目は十戒に合わせてできた祈りである。カルヴァンがフランス語に翻訳し，ジョン・ノックスがそれを拡張し英語に翻訳した罪の告白の祈りはこの二番目のものであった。このリタージーでは用意された三つの「罪の告白の祈り」のいずれかを用いた後，牧師はテモテへの手紙一の 1:15 を引用した上で会衆一人一人に心の中での罪の告白を勧め，その罪の赦しを宣言する。またその後，慰めの言葉を聖書から引用することもあった。また使用できる例としてヨハネによる福音書の 3:16，3:35-36，使徒言行録10:43，またはヨハネの手紙一の 2:1-2 があげられている。そして，その後，会衆は詩篇歌や讃美歌を歌う。また，キリエ・エレイソンとグロリア・イン・エクセルシス・デオを唱えることもあった（Maxwell，99-103)。以上は罪の告白の祈りやその赦しにかかわる改革派のプロテスタント礼拝のリタージーの原型である。

カルヴァンのリタージーが確立されたのは1538-41年のストラスブール時代であった。ジュネーブから追い出されたカルヴァンはブツァーから歓迎され，ストラスブールで神学研究と著作作業に取り組んだが，迫害を逃れ亡命してきたフランス語を話すプロテスタント信徒の牧会を托された。カルヴァンはストラスブールの改革者が作ったリタージーを高く評価したようで，それをほとんどそのままフランス語に翻訳して用いた。1540年にカルヴァンはストラスブールでフランス語の礼拝をする教会のためにそのリタージーを含む式文集を出版した。1541 年にジュネーブに呼び戻されたカルヴァンは 1542 年に La Forme des Prieres と言う式文を出版した。カルヴァンはこの式文の中にストラスブールのフランス語のリタージーを少し短縮した形ではあるが基本的には同じも

NII-Electronic Library Service

Tokyo Union Theological Seminary

のを取り入れた（Maxwell, 112-114）。

ブツァーとカルヴァンは公の礼拝における罪の告白の祈りの聖書的根拠をヨハネの手紙一 1:9 のみならず，レビ記 16:21，ネヘミヤ記 9:6-37，そして詩篇の32篇，42篇，51篇に見出している（Bruggink，Reformed Review, Vol.48, No.2，81）。

1537年に用いられたストラスブールのドイツ語のリタージーは罪の告白から始まっている。カルヴァンは1540年のストラスブールのフランス語のリタージーと1542年のジュネーブのフランス語のリタージーの前に詩篇 124:8 を入れた。上に述べたストラスブールでのフランス語とドイツ語のリタージーでは共に罪の告白の後に聖書の赦しの言葉と赦しの宣言があり，ジュネーブのリタージーでは罪の告白の後に赦しのための祈りがある。このことは宗教改革者が正義の神を礼拝し，その御言葉に聞くためには上記のような心の準備が必要条件であると見做していたように思われる。

スコットランドからジュネーブに亡命してきたジョン・ノックスは，ジュネーブで亡命者のために英語の礼拝を担当するようになった。ここでノックスは，カルヴァンの説教に学びつつ聖書の原典研究に励む平安な数年をすごした。その間に彼はジュネーブの英語の会衆のためにカルヴァンのリタージー（ジュネーブのフランス語版）を英語に翻訳し（完全な直訳ではないが）1556年に The Forme of Prayers として出版した。当然ながら，カルヴァンのリタージーと同様にこのリタージーも罪の告白とその後の赦しのための祈りから始まる。1560年にスコットランドに戻ってその改革の中心人物となったノックスはこのリタージーをスコットランドに伝えた。それ以来，このリタージーは80年間スコットランド諸教会における礼拝の基準であった（Maxwell，123-127）。

このような展開によって，執り成しの祈りと共に，罪の告白の祈りやそれに伴う赦しの言葉はストラスブールとジュネーブとスコットランドを経て主なプロテスタント教会の礼拝のひとつの基準となった。

カルヴァンはすべての牧師が自由祈禱によって優れた公の祈りが出来るとは考えていなかった。カルヴァン自身も普段罪の告白の祈りと執り成しの祈りに

NII-Electronic Library Service

Tokyo Union Theological Seminary

は式文祈禱を用いた。但し，説教後には自由祈禱を用いた。このようにして，ジュネーブではカルヴァンが出版したLa Forme des Prieresのリタージーの式文祈禱と自由祈禱が一種の均衡を保っていた。そのリタージーの式文祈禱でも罪の告白の祈りと執り成しの祈りが均衡を保っていた。また，この二つの祈りにはキリスト教の祈りに欠かせない要素が含まれている。罪を告白し，赦しを求める祈りはその本性上内側に向けられ，主観的で内省的である。それに対して，執り成しの祈りは外側に向けられ，教会の育成と世界の救いに向けられている。罪を告白して赦しを求める祈りは洗礼につながり，執り成しの祈りは聖餐につながる。洗礼は罪の赦しへの洗礼であり，罪に死に，正義を目指して生きるしるしである。われわれの洗礼はたえず悔い改めるようにと呼び掛けている。それに対して，聖餐につながる執り成しの祈りは神の国の成就を待ち望み，その完成のために祈る。したがって，教会の育成のみならず，諸民族の回心と聖徒の堅忍のための祈りである。また，ジュネーブにおいて用いられたLa Forme des Prieresのリタージーではもう一つの要素で礼拝のバランスをとっている。それは讃美と感謝の表現として用いられた詩篇歌Metrical Psalmである。聖書の祈りの豊かさがこのリタージーには生かされていた(Old, 100-101)。

このカルヴァンのリタージーはジュネーブとスコットランドのみならず，フランス，スイス，南ドイツ，オランダ，デンマークなどの改革派の教会において，プロテスタントの礼拝の規範となった(Maxwell, 119)。その実例の一つとして，イギリスのピューリタンが支持したオランダのミドルバーグ・リタージー（1586年）があげられよう。このリタージーでも聖書の朗読と説教の前に罪の告白をし，その赦しを求めるといったカルヴァンの祈りの形式が残っていた（Thompson, 322)。

プロテスタント礼拝と祈りの変質

1645年にスコットランドの教会の新しいDirectory for Public Worshipが出された。これには式文の祈りが含まれていない。むしろその内容はそれぞれの

NII-Electronic Library Service

Tokyo Union Theological Seminary

式のための明確な指示である。つまり，ジュネーブにおいて用いられたカルヴァンのリタージーと違って，式文やリタージーそのものよりも，儀式における指図書き（rubrics）の方が多くを占めていた（Nichols, 99)。しかし主日礼拝のリタージーにおいては具体的な長い罪の告白と赦しとその宣言の祈り及び聖別された生活の勧めが含まれていた。ただ礼拝の順序においては多くの変化が見られた。カルヴァンのリタージーやそれを起源にしていたノックスの The Forme of Prayers では心の準備として罪を告白し，赦しを求める祈りが御言葉の朗読と説教の前にあった。そして，御言葉に対する応答として，教会の育成と世界の救いに向けられていた執り成しの祈りが説教の後におかれていた。この順序には礼拝における神学的な意味があった。しかし1645年のスコットランドの新しい Directory for Public Worship は，The Forme of Prayers と英国国教会の Book of Common Prayer さらに独立派の習慣との三者の妥協によって作られたものであった。この礼拝順序では御言葉の朗読と説教の間のところで罪の告白と赦しとその宣言の祈り及び聖別された生活の勧めと幅広い内容の執り成しの祈りが一つに纏められ非常に長い祈りとなった。これでカルヴァンのリタージーの本来の礼拝における流れ，その神学的論理的発展が崩れた（Maxwell, 129-130)。

この Westminster Directory ともいわれる Directory for Public Worship の礼拝順序では最初に短い開会祈禱（Invocation）と説教後の短い祈りがあったが，主要な祈りは聖書朗読と説教の間におかれ，讃美，罪の告白，嘆願，執り成し，感謝の五つの要素を含む祈りが推奨された。その結果，礼拝において非常に長い祈りが習慣となった。このような祈りの形式はピューリタン運動の長老派よりも，ピューリタン運動の会衆派の影響が反映されていた。実は，1645年のウェストミンスター会議で定められたこのリタージーで見られる方針はピューリタンの長老派と会衆派の間の妥協の産物である。基本的には会衆派の要求が受け入れられたが，最初の短い開会祈禱と説教後の短い祈りは長老派の要求に対する妥協であった。この礼拝における新しい祈りのパターンが従来のカルヴァンのリタージーに取って代わって主流となった。したがって，それ

NII-Electronic Library Service

Tokyo Union Theological Seminary

以来スコットランドの長老教会を含む多くの教会で広く用いられるようになる礼拝順序は主にピューリタンの会衆派の礼拝感覚を現しているといえる（Old, 101)。

特にピューリタンの政治家クロムウェルがイギリスとスコットランドとアイルランドを支配した時代から広い範囲にわたって公の礼拝の内容が貧弱になった。リタージーの無視と徹底的な単純化の時代が始まっていた。17世紀から主日礼拝における祈りの実践は大きく変化した。礼拝における長い自由祈禱が標準となって，式文祈禱について疑惑が生じた。ピューリタンの影響による礼拝の内容の変化とそれに伴うリタージーの無視と単純化の傾向はオランダ，ドイツ，ハンガリー，スイスまで及んだ。こうして，17世紀後半以降の200年にわたる改革派の礼拝形式と性格が変えられた（Nichols, 90,100)。礼拝における変化に関わるもう一つの要因として，ノックス以来徐々に高まってきた説教の強調をあげることができる。もちろん，聖書の自国語による講解説教は宗教改革者の重要な貢献であった。特にツヴィングリとブツァーとカルヴァンとノックスは聖書の講解説教において大きな功績を残していることに疑う余地はない。そしてノックス以来，特に17世紀から，スコットランドの長老教会とピューリタン運動は驚くほど多くの偉大な説教家を生み出している。その多くはピューリタンであった。例えば，ジョン・プレストン，ジェムズ・アッシャー，エドムンド・カラミ，リッチャード・バクスター，またアメリカのニュー・イングランドではリッチャード・マザー，トマス・シェパード，ジョナサン・エドワーズなどをあげることができる。

しかし，宗教改革者は，神学的に整えられた礼拝の中で説教をした。すなわち信仰共同体の捧げる礼拝の中の説教であることに重点をおいていた。罪を告白して心の準備をすることは御言葉を聞く必要条件と見做していた。しかし残念ながら，西ヨーロッパとスコットランドの宗教改革者によって回復された御言葉と祈りとサクラメントの一致がピューリタンの影響で失われてしまった。17世紀から主日礼拝における罪の告白と赦しの強調が徐々に消え，礼拝は聖餐に繋がらない説教と説教者中心の礼拝へと変質していった（Old, 81-83)。

NII-Electronic Library Service

Tokyo Union Theological Seminary

ジェムズ・モファットによれば，スコットランドの教会の中にリタージーに対する反動が起こった。その理由は一方では当時の礼拝で自由が過度に強調されたこと，もう一方では王から押し付けられた新しいリタージーに対する反発からきていると言える。いずれにしても，不幸にも，スコットランドの長老教会でも秩序の良い式文祈禱，御言葉に聞く準備としての罪の告白や赦しを求める祈りを含む礼拝の重要な伝統の一面を失っていた。恣意的な，準備のない即興の祈りの方が霊的であるという先入観が広まり，主の祈りを礼拝の中で唱えることさえタブーとなることがあった（Moffatt，140)。また，イギリスの長老派と会衆派のいずれの教会においても18世紀と19世紀の間，礼拝の内容は益々貧弱になった。その構造は貧しく，祈りは長くて教訓的で説教がその公の礼拝の主要な行為であった（Maxwell，140)。

このようなプロテスタント教会の礼拝の在り方とその中の祈りの変質は17世紀の多くの国から来た移民と共に北米の諸教派にも伝わった。さらに国教会の無いアメリカでは自由教会と政教分離が実現され，英国やヨーロッパ大陸で考えられなかった政府当局の束縛を受けない自由の中で礼拝の形式が発展していった。植民地から独立国に変わっていく中でアメリカにおける諸教派も母国の教会から離れて独立した。その過程の中で共通の状況と影響によって，違う伝統を持つアメリカの諸教派の礼拝が徐々に似通ってきた。つまり英国の会衆派が要求していた礼拝の在り方がアメリカで超教派的に徹底的に実現されるようになった。説教中心であるピューリタンの礼拝の主な主題は個人の再生であった。ピューリタンの説教家は心と生活における純粋な回心，信仰による個人的福音の生活化，そして肉欲にふける時代の只中で純粋な献身を強調していた。

ピューリタンは礼拝における実存的即時性を強調した。彼等は16世紀の宗教改革者が前提していたような通常の教会の働き，つまり礼拝式と聖礼典と信仰訓練において聖霊が信徒の心を動かし養うという確信を持っていなかった。宗教改革者と違って，ピューリタンは神の臨在を歴史的教会の働きから基本的に区別する傾向があった（Nichols，97-98)。礼拝の指導者としての牧師の責任と自由が強調された。心と生活における純粋な回心を要求する上で即興的に祈

NII-Electronic Library Service

Tokyo Union Theological Seminary

り，情熱的に説教することが牧師の勤めであった。宗教改革者と違って，クリスマスとイースターをのぞいて，教会暦を完全に無視した。そして，旧約聖書の安息日に対する規律を主の日に適用した。教会は神中心の礼拝を捧げる聖餐共同体から，回心した個人の集まりの霊的集会と交わりに変わった。

ピューリタンの影響に加えて，アメリカにおける礼拝の新しい状況を生み出したもう一つの大きな要因はジョン・ウェスレーに始まった伝道運動である。つまり，ピューリタンの影響とウェスレーの伝道運動が共々にアメリカにおける信仰復興運動につながった（Jones, 148-150; Nichols, 96,100)。アメリカのピューリタンとウェスレーの伝道運動の双方において共通していたのは礼拝の形式と順序が非常に単純であったということである。また，即興的な祈りが好まれ，式文祈禱に対して疑惑を抱く点も共通していた。

アメリカに移った教派の中で礼拝のためにリタージーを含む式文を採用したものは少数であった。ジョン・ウェスレーが1784年に創立した北米のメソジスト教会ではウェスレー自身がその年に礼拝のためのリタージーを含む式文を用意した。この式文は内容的には17世紀のイギリスのピューリタンが要求した事柄の実現であった。新しいのは式文祈禱に加え即興的な祈りも取り入れ，反聖職制度を反映して，罪の赦しの宣言を罪の赦しのための祈りに変えたことである。しかし，このリタージーについては内容よりもその取り扱われ方が注目に値する。数年を経ずしてアメリカのメソジスト教会ではリタージーという表現さえ使われなくなり，即興的な祈りのみに変わり，式文があっても手引き書扱いにされ，単純な礼拝順序と伝道に対する情熱がその礼拝の特徴となった。

ヨーロッパから移って来た教派の内，ルーテル教会以外に，礼拝のためのリタージーを含む式文を用意したのはオランダとドイツ背景の改革派教会のみであった。これには式文祈禱も含まれていたが，聖礼典の式文以外は，用いるか用いないかは自由であり，まもなく実際には使用されなくなった。ここでも単純な礼拝順序と即興的な祈りに変質したのである。1788年に設立されたアメリカの長老教会ではウェストミンスター会議（1645年）で定められたスコットランドのリタージーを採用したが，スコットランドの教会と同様に手引き書扱い

NII-Electronic Library Service

Tokyo Union Theological Seminary

となり，他のアメリカの教会と同じように礼拝式文から離れた略式の自由な礼拝が標準となった。したがって，端的にいえばアメリカのほとんどの教会では，宗教改革者によって礼拝に取り戻された聖書とその講解は重んじられていたが，礼拝はピューリタン的，略式的，自然発生的，自由で，伝道的なものになっていった（Jones，150-156）。

アメリカの教会の信仰生活と礼拝に大きな影響を及ぼした今一つの運動がある。ピューリタンの刺激もあって発生したオランダ，そして後にはドイツの敬虔主義である。敬虔主義は形式的な正統主義に対する反動であって，信仰生活の改革を求めていた。そこでは意識的な回心を強調し，主観的感情的な経験を基準としていた。ピューリタンは社会的，文化的，政治的改革まで起こそうとしていたのに対して，敬虔主義は専ら個人の心と生活の回心を目指していた。この敬虔主義では式文祈禱は回心したクリスチャンに相応しくないと見做され，タブーとなっていた。18世紀の前半までにオランダ改革派教会ではこの敬虔主義が主流となっていた。また，すでに17世紀にこの運動はヨーロッパ大陸でオランダからドイツ，スイス，ハンガリーへと広まり，後にはその影響が北米にも及んだ。

18世紀の半ばにはこの敬虔主義運動の流れの中にもう一つの集団が現れた。チェコスロヴァキアのモラヴィア派の教会である。この独特な敬虔主義では特に神の子イエス・キリストの犠牲による贖罪論が強調された。その礼拝もユニークなもので，聖書や説教よりも，特に讃美歌によってその独特な敬虔を表現していた。彼等の関心は讃美歌によって救い主の苦しみを主観的に体験し実感することにあった。そして，モラヴィア派の教会は早くから海外宣教を含む伝道活動に取り組んでいた。

1736年にアメリカ訪問中のジョン・ウェスレーがモラヴィア派の移民者と出会ったことはウェスレーを変えた。モラヴィア派の感化を受けたウェスレーは回心主義と救いの確信の体験を強調するメソジスト派の創始者になったのである。アメリカで盛んに行われた巡回伝道の中で，モラヴィア派の影響もあって，メソジスト礼拝の特徴が明らかになっていった。つまり，即興的な自由な

NII-Electronic Library Service

Tokyo Union Theological Seminary

祈りとウェスレー兄弟によって出された福音主義的讃美歌（Gospel Song）の使用である（Nichols, 111-127)。

この様にピューリタンの影響と敬虔主義運動とウェスレーの伝道運動が1796年前後から始まったアメリカにおける信仰復興運動を導き出した。19世紀にはこの信仰復興運動がアメリカ全国に広まり，すべての教派に影響を及ぼし，アメリカをはじめ世界中のキリスト教の行方を変えた。それまではアメリカにおける自覚的なクリスチャンは少数であったが，この運動によってアメリカはいわゆるキリスト教国になった。

しかし，この信仰復興運動によってアメリカのプロテスタント礼拝が変えられた。個人の回心を目的としていたために，個人の信仰体験に集中する傾向があった。主観的な讃美歌と情熱的な祈りと説教によって会衆の感情に訴え，独特な雰囲気を作って，まだ回心していない人を回心させ信じる決心をさせることがこの礼拝の大きな役割になっていった。ここから礼拝はキリストの体なる教会の神に捧げる秩序ある行為に代わって，徐々に個人の感情を動かす伝道の一つの手段となった。その結果，礼拝は個人の霊的経験と個人の主イエスとの歩みを中心としたものとなり本来と違った意味の礼拝になった（White, 7-8; Webber, 82)。いい意味でも悪い意味でも，多かれ少なかれ，すべてのアメリカのプロテスタント教会とその礼拝はこの信仰復興運動の影響を受けていた。

世界宣教とプロテスタント礼拝

この信仰復興運動につながるもう一つの重要な運動がある。それは世界宣教運動である。特にアングロサクソン人の優勢な自由教会においては海外にいるキリストを知らない人に対する伝道の使命と責任を覚え意欲を燃やす人が多くなった。海外宣教師を派遣する団体が誕生し，19世紀中にアジアやアフリカに多くの宣教師が送られ，伝道が開始され，教会が設立された。この新しい運動は信仰復興運動と密接な関係がある。召命感を覚え，宣教師として出かけて行った人々のほとんどは敬虔主義的な信仰を持った人たちであった。そして，当然ながら，19世紀の宣教師がそれぞれの国で採用し伝えた礼拝形式は上に述べ

NII-Electronic Library Service

Tokyo Union Theological Seminary

た19世紀のアメリカの教会で行われていた標準的な礼拝であった。

日本も例外ではない。初期のきわめて少ない記録の一つ小澤三郎の『幕末明治耶蘇教史研究』には最初の日本のプロテスタント教会である海岸教会に潜り込んだ幕府のスパイの記録が残されている。その記録によると最初の礼拝の様子は極めて単純であった。明治時代の初期，日本の教会の礼拝は非常に単純で略式的であったようである。

実は，19世紀の後半から英国と北米においてはリタージーの見直しが始まっていた。但し，これは17世紀のリタージーの修正程度のものであった。それにもかかわらず諸教派の総会においてそれぞれの改訂版が容易に認められなかったほど抵抗を受けた。アメリカ改革派教会の場合，その三回目の改定が1868年に可決された。その順序は次のようなものである。

Invocation（牧師の開会祈禱），主の祈り，Salutation（牧師による聖書からの神の祝福の祈禱），十戒，愛の戒め（マタイ伝より），詩篇（交読文，その後讃詠も可），旧約聖書朗読，新約聖書朗読，讃美歌，一般祈禱（長い祈り），讃美歌，献金，説教，祈禱，讃美歌，祝禱。その後の約百年間はこの改訂版がアメリカ改革派教会公認礼拝式文であった。これで礼拝における秩序は一応整えられたが，長い間，会衆のレベルでは，抵抗があって実際の礼拝において余り用いられなかったようである。この改訂版自体不十分で，主日礼拝順序を見ても，部分的に歴史的な遺産を取り戻してはいるが，罪を告白して赦しを求める祈りはないし，決して宗教改革時代のリタージーの豊かさや礼拝に対する神学的論理性を十分に備えているとは言えない。

アメリカ改革派教会の宣教師エドワード・R・ミラーによって最初の日本語版のリタージーが明治15年前後に出版された（『日本基督教会歴史資料集(五)』参照)。注目すべきことには，これは上記のアメリカ改革派教会の1868年のリタージーの改訂版がほとんどそのまま翻訳されたものである。しかし，日本でもこのリタージーは実際にはほとんど使用されなかったようである（由木，212)。

明治時代の日本の教会の礼拝は宗教改革時代の礼拝式の神学的な深さや共同

NII-Electronic Library Service

Tokyo Union Theological Seminary

体の礼拝としての豊かさを反映していない礼拝であった。明治時代から大正時代にかけての日本のプロテスタントの標準的な礼拝順序について由木康氏は次のように述べている。「礼拝の理論と実践とにかんするかぎり，特筆すべきものは見られない。大多数の教会は在来の礼拝を，そのままくりかえしていたに過ぎない。それは讃美歌，聖書朗読，祈禱，説教，献金，報告，祝禱を無反省に組み合わせたもので，その順序に多少の変化があっただけである」（由木，212）。

以上の歴史的考察によって，日本のプロテスタント教会における礼拝のルーツと初期の状況をみた。現在の日本の教会で見られる礼拝式，礼拝順序，また礼拝に対する態度にはその影響が残っているように思われる。ピューリタンと敬虔主義とウェスレーの伝道が生んだ19世紀の信仰復興運動を背景とした宣教師の影響は大きかったに違いない。明治時代に紹介された礼拝が基準的なものになったと言えよう。特に20世紀の後半には日本においても礼拝の研究をする人が現れているし，関連の出版活動もあるが，その成果は一般の教会の礼拝においてはほとんど生かされていないのが実状ではあるまいか。

礼拝の体質改善を目指して

欧米でも19世紀の後半から始まったリタージーの見直しもすぐには実を結ばなかった。諸教派において礼拝に関する研究が徐々に進められていたが，第二次世界大戦後になって初めて欧米の教会での本格的な礼拝の研究とリタージー改善運動が軌道に乗った。

筆者の青年時代まで育ったアメリカ改革派教会の母教会では19世紀に認可された礼拝順序のままであったが，現在は変わっている。二十数年の研究と討論の上，総会の認可を経て1968年にアメリカ改革派教会が新しい式文を出版した。今では聖書と初代教会，教父，宗教改革，信仰問答の研究にもとづいて改定されたこの式文が筆者の母教会を含む多くの教会で生かされ，大きな成果をあげている。その特徴の一つとして，この新しい礼拝順序を見ると，神に礼拝を捧げる意味が明瞭に伝わる構成である。この改訂版は三つの部分すなわち

NII-Electronic Library Service

Tokyo Union Theological Seminary

① The Approach to God, ② The Word of God, ③ The Response to the Word からなる。これは御言葉を中心としたプロテスタント教会に相応しい礼拝順序である。ここには言うまでもなく罪の告白の祈りと罪の赦しの言葉が含まれている。この礼拝順序はハイデルベルク信仰問答の構造，つまり，guilt（罪悪），grace（恩恵），and gratitude（感謝），にも並行する。特に注目したいのはこの礼拝順序の最初の部分である。そこでは，カルヴァンのジュネーブのリタージーなどと同様に，罪の告白と聖書の赦しの約束の言葉がおかれている。宗教改革者と同様に正義の神を礼拝し，その御言葉に聞くためにはこのような心の準備が必要条件であると見做されている。これは罪意識と赦しの恩恵の確認なしに御言葉を聞く人間は理性で聖書に学ぶ姿勢ができても，本当に御言葉に聞くことは難しいという現実の表明である。

実際に20世紀の後半に欧米の長老派教会やメソジスト派教会を含む多くの教会はこのようなリタージーの改善をして本来のプロテスタント教会が持っている礼拝の豊かさを取り戻そうとしている。そこで重要視されているのは知的な面と情的な面の均衡である。過去の式文祈禱などに対する偏見が徐々に克服されてカルヴァンのリタージーに見られたような式文祈禱と自由祈禱の釣り合いを回復した礼拝も多くなった。また，多くの牧師は会衆が唱えるための罪の告白の祈りを毎週準備して，それを週報の礼拝順序に載せる。この様にして，会員のニードと現代社会の状況と文化を視野にいれながら，聖書とその説き明かし中心の，充実した，また解放と癒しと信仰による喜びを味わう礼拝にしようとしているのである。

日本の社会は恥の文化で，罪の概念がよく分からないと度々言われる。だからこそ，日本の教会の礼拝における祈りの中に罪の告白とその赦しを重要視する必要があるといえよう。我々罪深い人間は何の反省もなく，自分の立場を考えもしないで，聖なる神の前に出ることができるであろうか。本来の礼拝には懺悔が欠かせないのである。

多くの日本のプロテスタント教会での礼拝式や礼拝順序は今日でも19世紀に紹介されたままである。単純な礼拝順序が好まれているのかもしれない。ある

NII-Electronic Library Service

Tokyo Union Theological Seminary

いは，多くの教会では礼拝の順序やその神に礼拝を捧げるときの秩序，その流れ，その神学的な意味を深く考えたことがないのかもしれない。少なくとも牧会祈禱の中に懺悔の要素が必要である。しかし，教会によってはいわゆる牧会祈禱すらない。つまり，信徒の方が礼拝の司会をして，牧師の勤めは説教と説教後の祈りと祝禱だけである。その場合は自由祈禱である主要な祈りの内容はそのときの司会者次第である。少なくとも司会者の十分な訓練が必要であろう。上記の歴史から学べる宗教改革時代の遺産と現代における世界的な礼拝の体質改善運動（liturgical renewal）から考えて，日本の教会の礼拝の充実や活性化とそれに伴う教会の将来のために主日礼拝のリターージーを研究し，その改善を目指すときがきているように思うのである。

参考文献表

Bruggink, Donald J. "Contemporary Context and the Biblical and Theological Roots of Reformed Worship," *Reformed Review*. Winter, 1994-95, vol.48, no.2.

Jones, Ilion T. *A Historical Approach to Evangelical Worship*. Abingdon Press: New York, 1954.

Maxwell, William D. *A History of Christian Worship*. Baker Book House: Grand Rapids, 1982.

Moffat, James. *The Presbyterian Churches*. Methuen: London, 1928.

Nichols, James Hastings. *Corporate Worship in the Reformed Tradition*. Westminster: Philadelphia, 1968.

Old, Hughes Oliphant. *Worship: That is Reformed According to Scripture*. John Knox Press: Atlanta, 1984.

小澤三郎『幕末明治耶蘇教史研究』，日本基督教団出版局，東京，1973.

Thompson, Bard. *Liturgies of the Western Church*. World Publishing Company: Cleveland, 1961.

Webber, Robert E. *Worship Old and New*. Zondervan: Grand Rapids, 1982.

White, James F. *Protestant Worship and Church Architecture*. Oxford University Press: New York, 1964.

由木康『礼拝学概論』，新教出版社，東京，1961.

NII-Electronic Library Service

Tokyo Union Theological Seminary

参考資料

現在のアメリカ改革派教会の礼拝順序

THE OUTLINE OF THE ORDER OF WORSHIP

When the Sacrament of the Lord's Supper is not celebrated	When the Sacrament of the Lord's Supper is celebrated
THE APPROACH TO GOD	THE APPROACH TO GOD
Votum, Sentences, Salutation	Votum, Sentences, Salutation
°Hymn of Praise	°Hymn of Praise
Prayer of Confession	Prayer of Confession
Kyrie Eleison	Kyrie Eleison
Words of Assurance	Words of Assurance
Law and/or Summary	Law and/or Summary
°Psalter and Gloria Patri	°Psalter and Gloria Patri
THE WORD OF GOD	THE WORD OF GOD
Prayer for Illumination	Prayer for Illumination
Scripture Lesson(s)	Scripture Lesson(s)
°Confession of Faith	
°Hymn	°Hymn
Sermon	Sermon
Prayer for Blessing on the Word	Prayer for Blessing on the Word
THE RESPONSE TO THE WORD	THE RESPONSE TO THE WORD
	°Confession of Faith (Nicene)
Offering	Offering
°Doxology	°Doxology
	Sacrament of the Lord's Supper
	Meaning of the Sacrament
	°Hymn
	Communion Prayer
	Communion
	Communion Thanksgiving
	Prayers of Intercession
General Prayers	
°Hymn	°Hymn
°Benediction	°Benediction

°Some congregations may wish to stand at the points indicated by the asterisk.

NII-Electronic Library Service